⑽　カナダの小麦事情－世界一の品質管理体制！－

私は、８年ほど前に北農中央会より、カナダおよびアメリカにおける小麦の生産・流通に係る品質管理、品質育種の現状などの調査のため、両国を訪れる機会を与えられました。　ここでは、カナダ産小麦における流通過程と、品質管理システムについて述べてみましょう。

カナダでは、小麦の生産流通に係る主な機関・団体として、「カナダ穀物庁」などの国の機関、生産者が組織する穀物販売組織の「カナダ小麦局」と、その傘下にあるホィートプール（小麦集荷業者)、穀物会社などがあります。ホィートプール、穀物会社は、生産者から穀物を受け入れるカントリーエレベーターと、カントリーエレベーターから集められた穀物を調整・保管し、ユーザーに出荷するためのターミナルエレベーターを有し、国の指揮・監督のもとで穀物の流通部門を担っています。

生産された小麦は、最初にカントリーエレベーターに集められ、ここでは予めその年ごとに決められた標準品に基づいて、等級の格付けがなされ、蛋白含量を測定して大まかな仕分けがなされます。各地の小麦は、カントリーエレベーターから、貨車でターミナルエレベーターへと運ばれ、ここでは格付けのために行われる品質検査より、さらに精密な検査がなされ、同時に「カナダ穀物庁」の検査官によって、この受け入れ時のサンプルにより等級、夾雑物、水分などが公式に決定され、調整施設で銘柄ごとに規定されている品質に調整され保管されます。

ユーザーへの出荷・輸出に当たって、ターミナルエレベーターでは、再び品質の確認を行い、「カナダ穀物庁」の検査官による検査も同時に行われ、品質保証の証明書の発行を受けなければなりません。1989年の穂発芽の発生年には、カナダ産小麦の高品質維持のため、要望の厳しい日本向けには、とくに厳選して輸出したそうです。

この小麦の流れは、北海道と大差ないかもしれませんが、生産から流通・出荷までの品質管理では、それぞれのポイントで品質チェックがなされ、品質の仕分けが段階的に行われるなど、国が責任をもって、品質保証に当たる体制が整えられていることが、大きな違いと言えるでしょう。カナダ産小麦

の品質が「世界一」である理由はここにあるのです。

品質育種では、北海道と同様に、初期世代から育成系統の品質分析が行われています。しかし、品質育種を遂行するための品質検定、基礎研究などは、国立の品質研究部門が担当し、専門の技術者が育成系統の品質分析に当り、育成場へその情報を提供しています。また、遺伝資源の情報、病理部門など育種と、それをサポートする部門との連携が、密接な関係をもって進められ、これらの連携は、国立の研究機関・組織の協力関係のもとで遂行されています。北海道でも一部他部門との協力関係で進められていますが、残念ながら海外での力の大きさと、その連携には大きな違いがあります。

また、新しい市場開発をねらった研究も積極的に進められ、カナダでは、パン用の需要が頭打ちのため、めん用の育種（銘柄CPS）も開始されています。日本が輸入している小麦の中で、めん用はオーストラリアのASWが主流ですが、近い将来、カナダ産のめん用小麦が、日本に上陸する日も近いかもしれません。これらの点から、今後、道産小麦は、より一層品質向上が求められることになると思います。本年産から始まる民間流通では、海外銘柄と同等の品質をもつ、道産小麦の生産が求められるようになるでしょう。

北海道においても、品質管理に向けた取り組みがなされようとしていますが、今後益々、実需者に安定した良質小麦を供給する、品質管理システムの構築が、重要になると思われます。

＜土屋　俊雄＞